

# 学会通信

第8号

会員の皆さまへ

理事長 米山文明

学会通信第8号をお届けいたします。

昨年5月末に開催された第40回総会において、理事の改選が行われ、新理事会が発足、新年度に入って春・秋の例会と夏の研修会を終え、1年目の最終段階です。

今年度冒頭に掲げましたいくつかの計画は、ほぼ順調に進んでいるものと、かなり遅れているものがあります。進行状態のあらましをご報告いたしますので、ご忌憚のないご意見をお寄せください。

(1)教育部門：前期からの継続事項で、ほぼ予定通り進行中です。理事会三本柱のうち教育部門担当理事を中心に活動推進メンバーとして「教育部会」(仮称)をつくり、全体会と地域別部会に分けました。今後の具体的な活動をやり易くするために全国を便宜的に4ブロックに分け、各ブロックの中に①幼児期(3～6歳)②学童期(6～12歳)③思春期(12～18歳)の年齢別研究会をつくりました。

組織と役割などの詳細は、永井担当理事からの報告をご覧ください(学会誌33号に掲載)。

この基本計画に基づいて平成17年1月29日、第1回全体会議を開きました。年明け早々で早急な呼びかけでありましたのと、会場の都合もあって時間的ゆとりもなく、折角全国からお出でいただいた皆さまにはご不便、ご不満をおかけしましたこと、責任者としてお詫びいた

します。当日の運営も初回の顔合わせの意味を含めたこともあり、不慣れ、不手際の点、合わせてご容赦ください。しかし、初めていろいろな立場の方々から有益なご意見をいただきましたことは執行部にとりまして大変参考になり、今後の活動に役立ててゆく所存です。

ブロックの分け方、テーマの決め方、運営費のあり方、会議の進め方その他、企画、運営に関わる本質的な問題と、実践してゆくために生ずる部分的な問題点などを知ることができました。詳細は別に報告されますので、私の感じた総括的要点二つを述べます。

〔その1〕会の本質的理解について。

この会は何をやるのか?何を討議すべきなのか?という疑問を持たれた方(またはそれを求めて来られた方)がおられたように感じられた点です。折角出て来たのに問題点、討議点が明確に示されていないのが不満だということです。ある参加者の方で、冒頭の趣旨説明と会の組織づくりの説明は不必要で、予め文書を配布しておけば足りる。時間の無駄だから討論だけやればよいというご意見がありました。学会執行部の中さえそれに近い疑問もあるようですから、私の説明不足といえればそれまでですし、分かってもらえるまで説得するしかありません。しかし一方で、聞き手の方も少なくとも分かろうとする意志と実行するための前向きな意欲の有無も重要だと思います。この基本テーマにつきまして私はこれまで何回か「学会通信」「学会誌」に書きましたが、第1回目のこの会に私が最も期待したのは、これまで述べてきたことの再確認と、貴重な時間と費用をかけて全国から上京された先生方の多年の現場体験、それに基づく改革案をうかがうことでした。

発声、発語教育の根幹の何を、何時、どのようにすべきかの問題点が現場のどこにあるのかを私たち執行部こそが知りたかったのです。執行部から具体的プランを先に示すのは、それほど難しくはないと思いますが、現場の実態を無視して軽々しく具体策を出すのを私はあえて避けたかっ

たのです。この問題は早く結論を出せばよいというものでもなく（もちろん早いにこしたことはありませんが）、漫然と時間をかければよいというものでもありません。

次回からは、ご参加の皆様から前以て随時どんな方法でも結構ですから（電話、FAX、メール他）ご意見を送っていただき、それらの素材を実行案づくりに組み込んでゆくつもりです（宛先は事務局でも各理事宛でも結構です）。

〔その2〕当日出席会員の方からいろいろ良いご意見もありました。その中の一つを紹介します。

理事会でも前年度に完成させる予定の案件でしたが遅れました。「ホームページをつくり、インターネットによる情報交換を計るべし」というご意見で、早急に実現をはかりたいと考えております（担当理事により進行中）。これによって近い将来電子メール会議ができますと、リアルタイムの通信が可能になり、時間、交通費、会場費などの経済的、時間的なロスが省け、大きなメリットになります。そうなるとブロック別の分割に関わる大部分の業務（運営、会合、討論、報告など）が効率化されるでしょう。

(2)広報部門について：上記の件もあり、ホームページ計画も大幅に遅れておりますので可及的早期実現を期します。

(3)40年誌制作の件：会報編集委員長をチーフにしてほぼ編集メンバーは決まりましたので、実現に向け進行中です。

(4)夏季研修会の件：平成17年度は既に東京（ルーテル東京教会）を予定しておりますが、理事会にも地方開催の意見があり、目下検討中です。

例会のあり方、用語の検討、演奏会開催の方式など、進行遅れの案件がありますが、理事会一同一歩ずつでも前進の努力を重ねています。会員の皆さまのさらなるご鞭撻とご協力をお願いいたします。

## 【Q&A】

発声（練習）時間と休憩時間の配分について

昔、私が東大音声外来勤務の頃、耳鼻科外来の診察台の周りから同僚医師達と患者さんとの会話が聞こえてきます。「あなたは声の使い過ぎで音声障害を起こしたのだから気をつけなさい」「そうですか。わかりました」というやり取りを何度か聞いている中にふと感じたことがありました。医師達の言う使い過ぎとは、どのくらいの量を言っているのだろうか？という疑問と、患者さん達も何となく「そうですか」と納得している点でした。同僚達に尋ねても、ただ漠然と言っているだけで確たる根拠もありません。そこで練習時間と休憩時間の関係を調べてみようと思いついたのです。

初年度はアンケート調査をしました。都内各音楽大学の教員、生徒、プロ合唱団（東混、日唱、二期会、藤原他）、ソリスト達数百名でした。平常時と試験、演奏会の前に分け、1日の練習量（時間）と休憩量、1回のそれぞれの量を記入してもらい、男女別、声種別、年齢別に統計処理をしました。

さらに次の年度には現場（各音大のレッスン室、演奏会場の楽屋など）に出向き、練習（演奏）前と練習（演奏）後の喉頭所見を観察して結果を集計しました（記録の詳細は日本耳鼻咽喉科学会会報、第62巻第7号、p1~11、昭和34年4月「歌唱者の練習時間と喉頭所見に関する研究」に掲載）。

結論を要約しますと平常時の1日量は1時間~1時間30分、1回の量は約30分です。男女差、声種差、個人差などはもちろんあります。1日2~3時間の使用量を超えると翌日は発赤、浮腫などの悪影響が残ります。翌日は休むべき量です。

私は外来診療で患者さん（特に学生）によく言うのは「歌うだけが勉強ではなく、自分の喉がどのくらい歌ったら、どのくらい休めば元の良い状態に戻るかを知ること、つまり使う量と休む時間の必要量を知るのも大切な勉強です」ということです。これは個人個人が自分に適合した使用量と

休憩量を経験して覚えてゆくしかありません。そして常に喉のコンディションを良い状態に保っていないといざというときに間に合いません。

往年の名ソプラノ Lilli Lehmann の著書 “Meine Gesangskunst” にも生徒に教える言葉として「練習していて、漸く調子が良くなってきたと思う頃には止めなさい」とあります。調子に乗ってやりすぎると後が悪くなるからです。約30年前、私が E. Schwarzkopf に「あなたは演奏の後、休憩をどのようにとりますか」と尋ねた時、「私は若い頃には1晩コンサートをすると、翌日1日休めば大体元の良い状態に戻ったのですが、現在の年齢では中2日休まないと戻りません」と答えました（因みにこの時の彼女は50代の後半でした）。年齢的に若ければ回復力が早いのは当然ですから、年齢や歌う内容、その時の体調などによっても変わります。ですからこれらの点にも配慮すべきです。

いつでしたか私の見ていたテレビ番組で、アフリカのライオンが獲物を追って狩をする時、一度失敗をすると、2時間休まないと次の狩をしないということを放映していました。私達の運動系の骨格筋（随意筋）は使ったら、その後一定時間必ず休まないと元の状態に戻らないというのが原則なのです。（FY）

### 〔海外研修報告〕

ハンガリー音楽研修旅行に参加して(その1)

川上 勝 功

当学会の教育部門委員会では、足掛け4年の間に20回余りも研究会、勉強会、シンポジウム等を開いてきた。一昨年8月の夏季研修会のシンポジウム「欧米に於ける音楽教育の現状」の中で、特に私は個人的に、ハンガリーの「コダーイシステム」について強く興味を惹かれた。それまで合唱講座等で「コダーイシステム」について、その一端を垣間見てきたが、教育システムについての全容を知る機会は何もなかった。

私自身、大学での指導に加えて、30年以上も横浜雙葉で、高校1年生全員（180名）の大合唱や、中高生の聖歌隊（50名程）を指導してきた。日大芸術学部でも、声楽の個人指導だけでなく、大学合唱の指導を15年以上も続けてきたので、発声研究者として非常に恵まれた環境を与えられたとも思っている。そうしたことも手伝い、一度ハンガリーの教育現場を自分の目でしっかりと視察しようという思いに至ったしだいである。

今回の日本ハンガリー合唱交流委員会（後藤田夫規子氏）の企画主催する「第16回ヨーロッパ音楽研修旅行」は、非常に実り豊かで収穫の多い旅行であった。元旦に出発、10日に帰着というハードなスケジュールであったが、毎日が殆ど眼から鱗の連続であった。参加者は、現役の教育大学3年生から幼稚園や小中高校の現場の先生方、合唱指揮者と幅広く、しかも自費（40万位）で、3回4回と参加されている方が何人もおられた。

研修の前日2日（日）に、マーチャーシュ教会で行われた新年のミサは、式次第に従って、リストの「戴冠ミサ曲」が、オーケストラ、オルガン、混声合唱、及びソリスト付で全曲が演奏された。年の始めから何とも厳かで、しかも豪華な気分になれることができたものである。

研修の詳細は、学会誌33号誌上での報告に譲るつもりだが、研修第1日目(3日)にはケチケメート市のコダーイ小学校の音楽授業の見学や、学校の生徒達からなる少年少女合唱団、及びその卒業生の女声合唱団のリハーサル見学。また、教員養成大学付属幼稚園の訪問、そして「コダーイ研究所」の見学等盛りだくさんのプログラムであった。

4日、5日はブダペスト市内の、それぞれ別の小学校の授業を見学。ケチケメート市の小学校でもそうであったが、どこの小学校も先生方の質がとてつもなく優れており、特に低学年の先生方は、皆美しい声で、童歌や民謡等を歌って教え、子どもたちは、それをそっくりそのまま真似して歌うので、自然に美しい響きがついてきて、高学年になるにつれ、まったく癖のない、自然な美しい声

が出来上がってくるのがよく理解できた。

6～8日はニレジハーザ市のコダーイ音楽小学校を訪問し、日本では、すでにカンテムスやプロムジカの指揮者として何度も来日し、大変に有名なデーネシュ・サボー先生の授業を中心に1年生から8年生までの授業を見学した。6、7、8年生を受け持つサボー先生の授業は、とびきり素晴しかったのは言うまでもないが、やはり、低学年を教える先生方の質の高さに、ここでも驚かされた（内容については学会誌33号に報告）。

かなり盛りだくさんの研修プログラムを終え、ブダペストに戻ったとき、参加メンバーの多くが、この旅行に充分な満足感を得たと語り合っていたのが印象的であった。

### ●芸研連シンポジウムのお知らせ

平成17年度 日本学術会議「芸術学研究連絡委員会」（略称芸研連）のシンポジウムが下記により開催されます。

ところ 6月25日（土）関西地区の大学（会場は近日決定）

テーマ 「アートの一文化の変容の可能性」

\*出席ご希望の方は事務局までご連絡を。

### ●事務局からのお知らせ

#### ◇教育部門研究会（勉強会）◇

とき 3月30日（水）1時30分～4時40分

ところ 東京文化会館4F会議室

講師 伊藤直美

\*詳細は別紙「お知らせ」を参照のこと。

#### ◇第41回総会および第81回例会◇

とき 5月29日（日）10時～4時30分

ところ 東京芸術大学音楽学部

内容 研究発表 山田 実 永井和子  
橋田恵美子

特別講演 お話と公開レッスン

U. ガルディーニ（演出家）

現役声楽家の演奏とお話

五郎部俊朗（テノール）

### 〔会員だより〕

#### ◆演奏会◆

#### ◇ハインリヒ・シュッツ合唱団ドイツ公演◇

昨年12月11日より16日まで、会員淡野弓子氏の指揮する東京ハインリヒ・シュッツ合唱団は4回目のドイツ演奏旅行を行う。ベルリン、ドレスデン、そしてシュッツゆかりのヴァイセンフェルスにある城内教会でのコンサートには、指揮者のクルト・マズーア氏もかつて同合唱団の団員であったトモコ夫人と共に来会し賞賛。総立ちの拍手に包まれて幕を閉じた。同合唱団の東京公演は3月18日（金）19時より「東京カテドラル聖マリア大聖堂」にて開催。“受難楽の夕べ”（字幕付）

#### ◇丹羽勝海リサイタル◇

とき 3月30日（水）

ところ 東京文化会館小ホール

曲目 日本歌曲・沖縄のうた・世界の民謡

共演 山越亨子（ソプラノ）安田裕樹（ピアノ）

富樫亜紀（チェロ）

入場料 5,000円（全席指定）

予約・お問合わせ 03-3204-9933 東京労音

### 〔事務局より〕

◎第82回11月例会の研究発表を募集いたします。締切は5月29日です。学会通信への投稿もお待ちしております。こちらの締切は9月末日です。演奏会、出版、CD制作等近況についてもどうぞ事務局までお寄せください。 事務局長 川上勝功

学会通信 第8号

平成17年3月8日

日本声楽発声学会事務局

〒275-0005 習志野市新栄2-9-2 西村暁子方

TEL./FAX. 047-479-5701